



投稿

2003年7月19日〜24日

アバチャ山登頂の思い出

木村 泰治

\*登山行程

- 1日目 名古屋〜新潟〜ウラジオストック〜ペトロパブロフスカムチャッキー
- 2日目 カムチャッキー〜アバチャ山ベースキャンプ〜フラートレッキング
- 3日目 ベースキャンプ〜アバチャ山登頂（2800m）〜ベースキャンプ
- 4日目 フラートレッキング（予備日）
- 5日目 ベースキャンプ〜ピストラヤ川下り（川釣り）〜温泉〜カムチャッキー
- 6日目 カムチャッキー〜ウラジオストック〜新潟〜名古屋

子どもの頃からどうして

3回目のロシア訪問

久しぶりに白夜の生活

も行って見たかったカムチャッカ。北海道地図を見ては、その最果て千島列島、ベード、カザフ共和国を訪れ、リング海峡、カムチャッカ半島に思いをよせていた。ここは日本有数の魚場で、日露漁業の発祥の地。歴史上の人物に、司馬遼太郎さんの「菜の花の沖」に登場する高田屋嘉兵衛とゴローニン少佐の実話はあまりにも有名だ。私は函館から漁師を諦め名古屋方面に来て37年。今回登山が縁でとうとうカムチャッカの旅を実現することができた。

ただ今回は登山が目的なので町を訪れることはできなかった。が、北方領土問題を始め、日露にはなお多くの難しい問題が横たわっている。しかし庶民の感覚で岳友仲間による国際交流を深め、溝を埋めていくことができた。



【写真】ベースキャンプよりアバチャ山

ただ今回は登山が目的なので町を訪れることはできなかった。が、北方領土問題を始め、日露にはなお多くの難しい問題が横たわっている。しかし庶民の感覚で岳友仲間による国際交流を深め、溝を埋めていくことができた。

熊の足跡

ベースキャンプに行くには、大きなタイヤの六輪駆動の軍用バスなのだ。途中、



【写真】多軍用車を改造したバス

「熊」と言ったが熊の姿は見え、すぐバスから降りて見た足跡は、とてつもない大きく大人の手のひらを二つ並べたくらいの大きさにみんなビックリ。ホテルの奥深いところでマーマットとともに眠りにつく。

世界自然遺産のカリヤク山とアバチャ山

このベースキャンプ一帯が世界自然遺産に登録されているが、何もない広大な原野だ。カリヤク山とアバチャ山のまだらな雪渓、高山植物と蚊の組み合わせも今では懐かしい。



【写真】カリヤク山を背にガイドさんと

最後の晩餐、カチューシャで別れを惜しむ

この日は予備日。朝食後「らくだ山」や高山植物を見にキャンプハウスの周辺に散策に出かける。「らくだ山」のピークは、どこか日本の槍ヶ岳に似ており世界自然遺産の全景を見ることができた。

夕食前に各人が下山の準備をしていると、お世話になった現地ガイドが別れの挨拶に来た。みんなも最後直してしまっ。みんなは手を出さず、直つて、已む無くみんなが彼らが見えなくなるくらいまで1時間遅れで、ピリョシキ村のピリョシキにありつ。この食べ物には薄いパンの皮に芋やひき肉を巻いたものだが、私は村の何かを見物すると思込んでいたのがっかりだった。

ベースキャンプ場支配人から簡単な説明を受けた後、各人の小屋に入った。小屋と言っても日本と言うJR貨物のような箱だ。ベッドと言ってもベニアで上下に仕切った簡単なものだが4人で快適に過ごす。食事は、パン、サラミなど燻製類が主体で、なかなか慣れるまでに時間がかかる。ツァーリーダーの吉田さんが持つて来たわさびと醤油、漬物が非常に美味しかった。

山頂からは、カリヤク山の上品な山容と、その奥に雪を抱いたシベリヤの山々を遠眺することができた。

パザール（市場）のこと

ハバロフスクのパザールに比べれば規模も小さいが、果物や野菜類の豊富なことに驚く。特に魚市場は、大雑把でグロテスクだ。小売などはしていない。ロシア人らしく商品を、ただゴロ置きにし、虫が来ようがおかまいなしだ。「かに」を期待したが、日も持ちしないのであきらめる。ロシア人は観劇とパザールが一番好きで、交流の場を求める人懐っこいがあるのだ。

軍用バスのパンクとピリョシキ村

帰国後に写真を見せるとみんなが一番驚くのが軍用バスだ。なかでもド太いタイヤなのだ。それをじかに見た我々はもつとビックリ。そのタイヤがなんとパンクしたのだ。信じられない偶然のいたずらだが、これも泥沼の温泉だ。キャンプ場にあるように、みんなは水着を着て温泉入浴を楽しんでいたが、私は日本の温泉と感覚が違いすぎて、入ったがすぐ出てしまった。

ホテルの温泉とパラトンカ温泉郷

ホテルの温泉は荒壁の温泉プールだったが、川下りの帰りに立ち寄ったパラトンカ温泉郷・マルキ温泉は泥沼の温泉だ。キャンプ場にあるように、みんなは水着を着て温泉入浴を楽しんでいたが、私は日本の温泉と感覚が違いすぎて、入ったがすぐ出てしまった。



【写真】ヒグマの足跡

ベースキャンプのシヤ

天の川と北斗七星が大きく

ベースキャンプ場支配人から簡単な説明を受けた後、各人の小屋に入った。小屋と言っても日本と言うJR貨物のような箱だ。ベッドと言ってもベニアで上下に仕切った簡単なものだが4人で快適に過ごす。食事は、パン、サラミなど燻製類が主体で、なかなか慣れるまでに時間がかかる。ツァーリーダーの吉田さんが持つて来たわさびと醤油、漬物が非常に美味しかった。

山頂からは、カリヤク山の上品な山容と、その奥に雪を抱いたシベリヤの山々を遠眺することができた。

パザール（市場）のこと

ハバロフスクのパザールに比べれば規模も小さいが、果物や野菜類の豊富なことに驚く。特に魚市場は、大雑把でグロテスクだ。小売などはしていない。ロシア人らしく商品を、ただゴロ置きにし、虫が来ようがおかまいなしだ。「かに」を期待したが、日も持ちしないのであきらめる。ロシア人は観劇とパザールが一番好きで、交流の場を求める人懐っこいがあるのだ。

軍用バスのパンクとピリョシキ村

帰国後に写真を見せるとみんなが一番驚くのが軍用バスだ。なかでもド太いタイヤなのだ。それをじかに見た我々はもつとビックリ。そのタイヤがなんとパンクしたのだ。信じられない偶然のいたずらだが、これも泥沼の温泉だ。キャンプ場にあるように、みんなは水着を着て温泉入浴を楽しんでいたが、私は日本の温泉と感覚が違いすぎて、入ったがすぐ出てしまった。

ホテルの温泉とパラトンカ温泉郷

ホテルの温泉は荒壁の温泉プールだったが、川下りの帰りに立ち寄ったパラトンカ温泉郷・マルキ温泉は泥沼の温泉だ。キャンプ場にあるように、みんなは水着を着て温泉入浴を楽しんでいたが、私は日本の温泉と感覚が違いすぎて、入ったがすぐ出てしまった。

コロナ対応カンパ (10月14日現在)

協力者数 66人

協力金額 903,450円

たくさんの方々からカンパをお寄せいただき、ありがとうございました。